はじめての集団経験の意義

―心理療法の経験から―

岩村由美子

子どもに関する種々の相談を受けたり、問題によっては、親や子どもに対して、心理療法と呼ばれる援助を提供したりする機関で仕事をしていると、時折たずねる幼稚園での子どもたちが友だちと集団になって遊んでいる時の活発さや、表情の生き生きしている様子に、これが普通の子どもの姿なんだと、当然と思われるようなことが強く心に響いたり、また、一対一で話をする時、黙りこくってしまって、こちらの問にもほとんど答えてくれない子どもに出合ったりすると、この子がいつかは、自分に対する安心感を得て、必要なことだけは話せるようになってくれるかしらと、心配したりする。

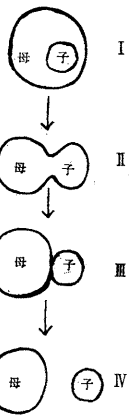
殊に都会では、行くのが当たり前みたいに大部分の子どもが受ける幼稚園教育、その意義は、いろいろ考えられると思うが、今までの調査や研究、心理療法で扱った事例などから、私は、その意義を次の二つに、大きくまとめてみたいと思う。

「お母さんと一緒」から
「自分は一人」へ

「ゴリラ探検記」(河合雅雄著・光文社)

という本を読んだ。ゴリラは、毎夜、竹を曲げたり灌木を使って新しい巣を作って寝るそうだ。そして、必ずそこでフンをするそうだ。そのフンの大きさでゴリラの大きさが分かる。子どもはアカンボの時は、母親の巣の中に寝ているが、大きくなるに従って、大小の巣がくっついてヒョウタン型になり、もう少し大きくなると、二つの巣が接し合い、次第に独立した巣を作るという過程が実に鮮かに観察された、と著者は記し、次のような図を示している。又、氏は、ゴリラ探検には、「生きた化石とでもいうべ

き、人にもっとも近い動物、マウンテンゴリラの研究から、人類の歩んできた道を探ろう」と、情熱を燃やした、と書いておられる。



人は生まれた時の全くの親への依存の状態から、心理的にも離乳し、独立し、社会生活を送る人になっていく。この過程と同じものが、人間に一番近いといわれるゴリラでは、動物にとっては必須の眠りの時を過ごす巣という場所に、具体的に見出されるのがとても興味深かった。（しかも、はじめの巣の中のウンチは、ウィンナソーセージ位で、その大きさと共に、巣の形態が変化するのを知った時には思わず、にやっと笑ってしまった。）

人が心理的に、母親から離れていく様子は、具体的に見ることはできないが、模型的には、全く同じものを考えてよいだろう。Ⅰにおいては、子どもは心理的にも、又目にみえる行動面でも、その活動範囲は、母親のそれの一部の中にすっぽり入りこんでいる。Ⅱになると、お互いにいつでも、行ったり来たりはできるが、母親と子どもの距離が少し広くなる。子どもの発達過程でいえば、歩くことがもうすっかり上手になった二才前後の子どもが、機嫌のいい時や、自分で気にいるものをみつけた時は、一人で遊んでいるが、痛い目にあったり、びっくりしたりすると、すべてのことを中断して母親の所へ走っていく様子を思わせる。Ⅲは、距離は近くても、一応子どもは自分の世界をもてるまでに成長した段階である。幼稚園に入るころには、一日中でなくても、この状態に、母親も子どももいられることが望まれる。Ⅳは、成人に普通にみられる、最後の段階である。

ゴリラの場合は、おそらく、生後どの位のものが、どの型を示すかということは、だいたい決まっているのだろうが、人の場合は、この離れ具合を決めるのに、文化的、社会的、心理的、その他様々の要因が関係するので、子どもの年齢によって、一概に、どの型といえない所が、考えなければならない点でもあり、興味ある点でもある。

入園して来る、四、五才児の大部分は、母親から離れることができ、母親のいない所でも、友だちや先生と話をしたり、あそんだりすることができる。ここで考えておかねばならないことは、この子どもたちがいつでもⅢやⅣの状態であるかというと、そうではなく、ⅠやⅡの状態の時も一日の中にはあり、時々にその状態を求めて泣いたり、保育者にくっついたりする。考えようによっては、幼稚園児では、全くⅠ、Ⅱの状態を示さない子どもの方が、母親が、ベタベタ甘えられるのが嫌さに、早くいい子に育てようと無理をしているなど、問題となるケースが多いのではない

か。また、入園するまで、Ⅰ、Ⅱの状態ばかりだったり、Ⅲを極くまれに短い時間しか経験したことのない子どもは、母親から離れられず泣いたり、暴れたりすることが多い。このような子どもには、段階をおって成長させることをしなければ、どこかに無理がでて来よう。登園したら母親と別れることを決めてある幼稚園は多いと思うが、Ⅲの状態を一度も味わったことのない子どもから、急に母親を離すのは、子どもを強い不安状態におとし入れ、段階的成長をより遅らせるのではないかと考える。

幼稚園の一年ないし二年間の生活の中に、子どもたちに母親から離れていても、自分はことが果たせるという安心感、安定感を備えてあげることが大切であろう。決められた時間、毎日、今までは、こわいことや、いやなことに会ったり、恥ずかしい気持ちがおこったりした時には、逃げていけばよかった母親や、自分のすることを、何でも上手だとほめてくれた祖母から離れて、幼稚園で過ごすのは、新しい経験をたくさんして、楽しい時もあり、緊張の余り疲れてしまう時もあるだろう。

「自分を表現すること」と

「自分を抑えること」

この二つは反対のことをいっているが、幼稚園の時代に、一番伸ばしていかなければならない芽ではないかと思う。これは、人が生涯を通して、自分に課す課題であるかもしれない。感じ、考え、いろんな方法で表現していく。ある時は、他の人の気持ちを汲み、考えを吸収して、協調して何かをする。この二つが、思慮深く、円滑になされることは、全くすばらしいことであろう。

赤ん坊のころは、表現に、ただ一つ泣くことを使う。自己抑制のできない時も泣く。言葉で意志を表現できるころになって、無理な要求を出すと、母親はそれを拒否する。すると子どもは、持っていた玩具を投げつけたりする。母親は、投げてはいけないと禁止する。子どもは泣くが、投げるのは止める。こんなふうにして、自分の希望の入れられない時に、どうしたらいいのかを覚えていく。幼稚園に入るころまでに、親が、この自分を抑える方法を、上手に習得させる機会を与えなかった子どもは、ブランコの順番が守れず、他の子を押しのけたり、叩いて泣かせて玩具をとり上げたりする。自分の意志を表現できない子は、いいなりになってしまったり、集団に加わらず、指を口に入れてボツンとみていたりする。

人の成長課程には、その時は困った行動として現われるが、時が経てば良い結果をもたらすものもある。一方、時と共にむずかしくなるものもある。この自己表現と自己抑制を上手にするというのは、こちらに属する。幼稚園の時にこれらの不得手な子どもには、その方法の緒だけでもわからせてあげたい。

先生はお母さんでよその人

これまで述べた意味での子どもの精神的成熟の度合は、子どもの身体的、知的な面、家庭の経済的、社会的環境、母親の知的な面や情緒の安定度によってきまる。入園時には、これらのいろいろ違った子どもたちが揃うのだから、先生方の役割も、いろいろなものがあろう。ある子どもには、やさしい母親になり、ある子にはきびしい母親に、ある子には自分のいいたいことは、はっきりと全部いわないと通じない他人になったり、困っている時に助け舟を出す人になったり。母親と共にある状態から、他人の中で生活する課程を考えると、子どもが、はじめて接するよその人である幼稚園の先生は、甘やかす一方だったり、干渉がひどかったり、拒否的だったりする母親をもった子どもには、より中立的な母親の立場をとって、又ある時は、対立意見を出したり、教えてくれたり、叱ったりする他人の立場をとることがいいのではないかと思う。

入園当初、園へ行きしぶったり、母親と別れる時泣いたりする子どもが、どの位いるのか調査したことがあった。細かい数字はちょっとおぼえていないが、かなりの数みられたのをおぼえている。しかし、一か月後には非常に少なくなっていた。はじめての集団生活に不安で緊張するが、大部分は、間もなくなじんで行く。一部残る〝困る子〟には、その子どもに関して、多方面にわたり、深く検討してみて、適切な扱い方がなされなければいけない。その後、登校拒否児の調査をした時に、ケースの中には、登校拒否以前に、登園を泣いていやがったが、幼稚園だから、学校にいくようになったら行くだろうと、幼稚園をやめさせたというようなのもあり、幼稚園時代の適切な扱い方の重要性を痛感したことがある。

この間、新聞に、東京の中心のある区で区立幼稚園の越境入園締出しを決めたという記事に関連して、あるコラムに、今の幼稚園教育のブームは、幼稚園教育の効果を見きわめた上でのことではなく、むしろ「隣も行くから家も……」という流行にすぎないともいえるわけだ、とあった。たしかに、親の方は、幼稚園教育の持つ意味を深くは考えず、家においておくと、騒いでうるさいからとか、適当な遊び場がないからとか、子どもが行きたがるからなどの理由で、入園させる人もいるだろう。幼稚園生活の持つ意義を、時間をかけて、親たちと話し合い、卒園の時には、幼稚園生活を経験した果実を、親子ともにもてたら良いと思う。義務教育年齢の引き下げなどもきかれる今日、幼い時にはじめて経験する集団生活として、豊かな精神的成長を助けるような幼稚園生活を全ての子どもにさせてあげたい。

（日本総合愛育研究所）